

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際実験動物学会議
	英	International Council for Laboratory Animal Science (略称 ICLAS)
	団体 HP (URL)	<p>http://www.iclas.org</p> <p>(日本学術会議が加盟していることの記載 有 (無) National Member とし て : Japan (represented by a person appointed by an appropriate national body) と記載</p>
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>ICLASは、現在 30 の National Member の他に、38 の Scientific /Union (国内・国際学会等)、2 つの Institutional (非営利の大学や研究所)、21 の Associate (営利企業) で構成されている。毎年世界各国に亘る多くの Member の新規参加を得、Affiliate (協力関係にある国際組織) Member を加えてさらに国際的影響力を強めている。</p>	
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	<p>動物実験による人間への直接適用可能な種々の治療法の開発が進んでいる。特に人間の精神機能の発達と老化や社会ストレスへの反応に関する研究には、我が国が主導的に進めている遺伝子改変を含む霊長類を用いた研究が不可欠で、その実現への新たな倫理規範の策定が急務である。</p>	
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	<p>元学術会議代表の野村達次の提唱による、世界に先駆けた実験動物の品質規格の概念を、実験動物の品質管理とモニタリングセンターシステムプログラムとして採択し、当時の途上諸国にサブセンターの設置をもたらした (1979-2003)。さらに、動物実験データの信頼性・再現性向上をもたらす実験動物の品質の国際標準化への発展が期待されている。</p>	
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて	<p>ICLAS は、UNESCO の呼びかけに IUBS/CIOMS が応じ 1956 年に設立された実験動物の適正な使用に関する世界で唯一のアンブレラ協議会であり、30 の National Member に加えて 60 超の官・学・民の組織 member が一体となってミッションを遂行しているので、専門領域を超えた医療イノベーション等国民生活向上への直接的な貢献も期待できる。</p> <p>・加入していることによる我が国へのメリット (政策面含め)</p> <p>ICLAS は UNESCO の呼びかけに IUBS、CIOMS が応じて 1956 年に設立された、実験動物の適正な使用に関する世界で唯一のアンブレラ協議会である。National Member に Scientific (国内・国際学会等)、Institutional (非営利の大学や研究所)、Associate (営利企業)、Affiliate (協力関係にある国際組織) の各メンバーが加わり、官・学・民が協力一致して ICLAS のミッションを遂行している。このように ICLAS は、実験動物や動物実験といった専門領域を超えて、医療イノベーションを 1 例に我が国の国民生活の向上への直接的な貢献も期待できるため、学術会議の加盟は意義深いものと考えられる。</p>	

	<p>ICLAS の定款は National Member の役割について「ICLAS の進むべき方向を見極め、科学研究を推進すること」と謳っている。学術会議が National Member に加盟することによって、実験動物飼養保管等基準の軌道を踏み外すことなく、我が国の生命科学研究を科学的・倫理的に適正な方向へと導くことができる。このため、関係する分野の学会ではなく、国を代表する一の組織としての学術会議の参加が不可欠である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記について具体的な成果の事例</li> </ul> <p>学術会議が 2006 年に発出した「動物実験の適正な実施に向けたガイドライン」英語版が、動物実験に関する国際ガイドラインに引用され、法的枠組（ソフト・ロー）を踏まえた研究機関等による動物実験の自主・自律的適正化と、それがもたらした再生科学や医療の発展が国際的に注目されるようになった。</p> <p>上記の国内対応として ICLAS 分科会が受け皿となって、実験動物・動物実験に関する国際動向が適切・的確に把握・共有され、その結果、学術会議は科学と動物福祉のバランスが取れた医学生命科学の発展に寄与している。わが国の医学生命科学は国際レベルを超えるものであるが、動物福祉に関しても国際水準を満たすものとなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分担金支払いによる）費用対効果に関する評価</li> </ul> <p>ICLAS は実験動物の適正利用のために活動する唯一の国際機構であり、その発足以来過去 30 年間、日本は国際的に強い影響力を発揮してきた。ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカに対し、地域のニーズに根ざした、科学的合理性のある動物実験倫理の国際ハーモナイゼーションに取り組んでいる。これらの国際的活動における日本の主導的プレゼンスを発揮することが出来たことは、分担金の対価として大きく評価されよう。</p> <p>動物実験の科学的・倫理的適正化は国内外における喫緊の課題であり、国際ハーモナイゼーションの観点から日本学術会議 ICLAS 分科会の役割は多大である。2012 年に改訂された CIOMS-ICLAS の「医学生物学領域の動物実験に関する国際原則」を国内の関連学協会ならびに科学者に浸透させることには大きな意義があった。</p> <p>また 2015 年には元学術会議代表で永く ICLAS の発展に尽くされた故野村達次博士の功績を称えて Mühlbock-Nomura Award を創設し、その第一回として日本から伊藤守博士が受賞された。これまでの学術会議の貢献によって、国際的コミュニティーにおける日本の立場が大いに評価されたものと考えられる。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の</p>	<p>ICLAS は 2004 年に開始した新プログラムにおいて、実験動物の品質管理とともに動物実験の科学的・倫理的適正化に関する国際協調を目標に掲げて 5 種類のガイドラインを発出し、</p>

基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)	国際医学団体協議会 (CIOMS) と協働して国際動物実験倫理原則を 2012 年 12 月に改訂した。このように ICLAS は、社会的・文化的背景や関連法令の違いを踏まえた国際協調よって、実験動物のユーザーをも広く支援する国際組織となっている。
---------------------------------------	--

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)	本会は世界各地域を持ち回りで開催している。2016 年は日本が属するアジア地域のシンガポールで開催、今後はアフリカ、南アメリカでの開催を検討しており、直近の日本開催の予定はない。
日本人の役員立候補等の予定について	2015 年～2019 年が役員の任期であり、今期は学術会議代表の入来が理事 (Governing Board Member) を勤めている。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	異なる文化圏の価値観を包括し、「人間」の心身メカニズム研究のための霊長類長期介入研究の不可欠性を盛り込んだ、新しい動物実験倫理基準の提案を目指し、日本がワーキンググループを主導して素案を検討中。

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去 5 年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2015 年 (開催地: フェニックス)、2014 年 (開催地: モントリオール) 2013 年 (開催地: バルセロナ)、2012 年 (開催地: バンコク)		
	理事会・役員会等開催状況	2016 年 (開催地: シンガポール)、2015 年 (開催地: フェニックス)、2014 年 (開催地: モントリオール)、2013 年 (開催地: バルセロナ)、2012 年 (開催地: バンコク)、2011 年 (開催地: サンディエゴ)、2010 年 (開催地: 台北 )		
	各種委員会開催状況	2016 年 (開催地: シンガポール)、2015 年 (開催地: フェニックス)、2014 年 (開催地: モントリオール)、2013 年 (開催地: バルセロナ)、2012 年 (開催地: バンコク)、2011 年 (開催地: サンディエゴ)、2010 年 (開催地: 台北 )		
	研究集会・会議等開催状況	2016 年 (開催地: シンガポール)、2015 年 (開催地: フェニックス)、2014 年 (開催地: モントリオール)、2013 年 (開催地: バルセロナ)、2012 年 (開催地: バンコク)、2011 年 (開催地: サンディエゴ)、2010 年 (開催地: 台北 )		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	2015 年 研究集会 (フェニックス)	40 人	(入来篤史)	
	2014 年 研究集会 (モントリオール)	20 人	(鍵山直子)	
	2013 年 研究集会 (バルセロナ)	15 人	(篠田義一)	
国際学術団体における	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別

日本人の役員等への就任状況 (過去 5 年)	理事	2015～2019	入來篤史	( 23 期) 会員 (連携)
	副会長	2011～2015	鍵山直子	( 22 期) 会員・連携
	学術会議代表	2012～2015	篠田義一	( 22 期) 会員 (連携)
	副会長	2003～2011	玉置憲一	( 22 期) 会員 (連携)
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
出版物	1 定期的 (年 1 回) 主な出版物名 ICLAS Bulletin 2 不定期 ( ) 主な出版物名			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.iclas.org">http://www.iclas.org</a> )				

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	基礎医学委員会 ICLAS 分科会
	委員長名	渡辺 守
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等)  平成27年6月12日 ・第23期 委員長 副委員長の決定 ・次期 ICLAS 理事会への対応方針の審議 ・ICLAS 総会/理事会決議事項への国内対応の審議
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.iclas.org/about-iclas">http://www.iclas.org/about-iclas</a> )	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.iclas.org/members">http://www.iclas.org/members</a> )	
	下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印)	
	ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの	
	イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの	
	ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの	
	エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
10カ国を超える各国代表会員が加入している 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない		
加入国数及び 主要な各国代表会 表会員を 10 記載	(30ヶ国) ・各国代表会員名/国名 日本、韓国、タイ、インド、アメリカ、ブラジル、フランス、ドイツ、オーストラリア、チュニジア	